

教 仁 名 聞

第20号
(発行日)

2012年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

束縛からの解放

この世に生きる身にはさまざまな束縛がある。それゆえ、いろいろな束縛やしがらみや圧迫から解放されたいと願う。人間が一番求めているもの、それは「自由」であろう。

戦後、地縁血縁のしがらみの多いムラ社会から多くの人が都会に移住してきた理由の一つが「しがらみから解放されて自由になりたい」からであろう。都会の団地暮らしは確かに地縁血縁のしがらみは少なく、まわりから干渉されない自由を味わうことができる。

それでも会社勤めをする、今度は勤め先での組織や人間関係に縛られるという不自由さがある。今日フリーターが多いというのは、正社員として働く機会が少ないという理由もあるが、貧しくても人間関係に縛られないフリーターの方が自由だからとも言われている。

また、人間関係の束縛という面では、近年は結婚しない

人も多い。独り身の方が自由だからである。そして離婚が多いのは、性格が合わない人と無理に一緒にいるより、別れた方が気楽で自由だということの影響しているのである。

ただ、人間関係の束縛からのがれて独り身になると自由だけれども、今度は逆に、人間関係が希薄になりすぎて孤独が増え、それが今では社会問題となっている。

ところで束縛は当然、人間関係だけではない。自分のさまざまな個人性からも束縛される。自分の頭脳の良し悪しやいろいろな才能の有無、あるいは持てる財産の多寡や容姿の美醜など、それらを他者と比較することによって、プレッシャーを感じるのである。

現代のような自由社会では、個人の能力や資質や財貨などの個人差によって、勝ち組と負け組といわれるような

格差が生まれてくる。そうすると個人の器の優劣がストレスやねたみの縁になりやすい。それもいわば束縛であるといえる。

そして一番身近な束縛は、生理的な肉体からの束縛である。誰も老病死という束縛を免れないのである。

いつまでも若くありたいという願いは老化によってさまたげられ、健康でありたいとの願いは病気によってかなえられない。そしていつまでも生きたいという欲求は死によって絶対的に制限されている。

また、生きていくためには当然、肉体を養っていかねければならない。家族がおれば家族を養わねばならない。そのため汗して働かなくてはならない。肉体は「食わねば生きられない」という大きな束縛をかかえている。また暑さ寒さや騒音や大気汚染、今日では放射能など、環境からの束縛もある。

こうした束縛からどうしたら真に自由になれるのか。も

《 聖典学習会 》

毎月六日

(午後七時始)

現在、梯實圓著『教行信証(教行の巻)』(本願寺出版社)を輪読しながら、いろいろな問題を互いに自由に話し合いながら、学んでいます。どなたでも自由に参加して下さい。時間は2時間です。

もちろん言論の自由や貧困からの自由など、政治的経済的な方法によって得る自由もある。それも大事である。

しかし私という一個人にポイントをおけば、あらゆる束縛の本にあるのは「我が身と我が身への執着」であると仏教では説かれている。

人間関係のしがらみも、他者と比較しての束縛も、老病死に悩まされるのも、「我が身があり、我が身への執着」があるからであろう。

それゆえ真に自由になるには、我が身と、我が身への執着から解放されること、そこに真の自由があると仏教では説く。

その仏法を浄土真宗では、

例えば端的に「歸命無量寿如来」(無量寿如来に歸命する)と説かれている。

無量寿如来に歸命する道とはどのような道であろうか。

それは、この極めて限定されたいのちである我が身に軸足を置き、この身を私のよりどころとして立っている立場から、無量ないのち(無量寿・阿弥陀仏)にこそ軸足を置いてこの世を生き、この世を終えれば無量なるいのちに歸入するという道である。

我が身に寄りかかって生きようとする立場から、阿弥陀仏を軸足として生きる。これがお念仏の生活である。

これによって、さまざま束縛から自由になっていく道が開けてくるのであろう。

かといって、それは決してこの世の束縛を離れてどこかへ隠遁することでも逃避することでもない。

むしろこの世の束縛だらけの中を嘆かず、怨まず、絶望せず、束縛をお念仏の縁に転じつつ、束縛の多い中で自由を感じながら生きる道である。

(了)

正信偈に学ぶ問答

(四十一)

往還廻向由他力

正定之因唯信心

(書き下し) 往・還の廻向は他力に由る。正定の因はただ信心なり。

(現代語訳) 往相も還相も他力の廻向であると示された。浄土へ往生するための因は、ただ信心一つである。

*

A 「へ往還廻向由他力」については先月お聞きしました。

今回は「正定之因唯信心」についてお尋ねします。まず正定之因とは

D 「正定とは、まさしく定まるという言葉で、何がまさしく定まるかというのと、浄土に生まれること、あるいは涅槃界に至ること、あるいは仏になること、そのことが正しく定まる、というのです」

A 「浄土に生まれる、涅槃界に至る、仏になる、と云われますが、これらの関係はどうなんですか」

D 「浄土とは涅槃界のことで、

涅槃界とは涅槃のさとりを開く境界のことです。さとりを開いたお方が仏ですから、涅槃界に至るとさとりを開いて仏になるといわれています。

ですから浄土に生まれるとは涅槃界に至ることであり、涅槃界に至ることは仏になることなのです

A 「ではそれが正しく定まるのは、いつですか」

D 「本願を信じた時に定まるのです」

A 「本願を信じると浄土に生まれることが定まるのですか」

D 「ええそうです。弥陀の本願を信ずる信心一つによって定まるのです」

A 「それで、浄土に生まれるまさしき因はただ信心によるのであると仰せられるのですか」

D 「ええそうです。ですからあえて言えば、その他は浄土に生まれる因にはならないということです」

A 「私たちの行うさまざま善行も、坐禅の行も、戒律を持つことも、仏教の学問も、浄土に生まれるまさしき因ではないのですか」

D 「ええ、それらは皆、へ私(わが)の行う善や修行ですね。そうした凡夫の私たちが行う善では浄土に生まれることはできないのです」

A 「なぜでしょうか」

D 「凡夫である人間の行う善は煩惱の汚れを伴っており、煩惱まじりの善では清浄なる領域(浄土)に至ることは不可能であると、いわれています。『阿弥陀経』には

「舍利弗、少善根福德の因縁をもつて、かの国に生まれることを得べからず」と説かれています」

A 「へ少善根福德の因縁」というのは」

D 「凡夫の善行、あるいは修行のことを少善根といい、その行によって得る結果を福德というのです。それで私たちの煩惱まじりの心で行う修行の行因とその結果としての功德(福德)のことをへ少善根の福德」というのです。

そうした因縁では浄土に生まれることは不可能であると積

尊は仰せられています」

A 「そのところをもう少し詳しくおっしゃって下さい」

D 「私たちの行う善や修行に煩惱がまじるというのは、善や行を行う中に自我心が付いてまわるからでしょう。へ私が善をしたへ私が修行を行っている」という行は、ともすると自我を立場とした善・行になり勝ちです。ところが浄土も仏も、自我が消えた無我の智慧と慈悲の領域としての浄土であり、無我の智慧と慈悲の完成体としての仏ですから、自我を立場にした善・行はどれほどそれを積みあげても自我をこえた無我の智慧と慈悲を実現することはできないのでありましょう」

A 「自我を立場にした行善とは実際のどのようなものでしょうか」

D 「私たちが善を行う場合、執拗に付いてくるのは、善を行うことによってへ何かを得ようとする功利心」です。いわゆる、善を行って功德を得たい、楽になりたい、幸せになりたい、立派な人間になりたい、人から認められたい、善人と思われたい、金銭的な利益を得たい、自分を善人と

思いたいなど、どこまでもへ利を得たいへ良きものを得たい」という功利心が付きまといまいます。ですから自我を否定した無我の智慧とか無我の領域には至らないのです」

A 「自我の立場での修行にはへそれをやってなんぼ」という計らいが入るのですね」

D 「ええ例え、修行して一発ドーンとさとしてという意欲の中には、偉い人になりた

い、なつて人に敬われたい、供養を受けたいという野心が潜んでいます」

A 「そうですね」

D 「聖人は『唯信鈔文意』に、へ世をすつるも名のころ、利のころをさきとする」

と仰せられています。世をすつるとは、出家して仏道修行に入るといふことで、そういう仏道修行の生活にさえ、自分が偉くなつて名利を得たいという下心が付きとう、と厳しく見ておられます」

A 「純粋に、善なるがゆえに善を為し、修行なるがゆえに修行をする、というのではなくて、自我心が根にあると、そうした行いによつて、むしろ自我を拡大してしまうことになりかねないのですね」

D 「そうですね。オウムの事件

で、オウムの人たちが修行をする動機は修行をして、超能力を身につけたい、他者に優越したいという野心が根になつていたように思ひます。それは自我を否定する修行ではなく、むしろ自我を拡大する行為になつていったのだと思ひます。ですから道元禪師は修行してへ作仏をはかることなかれ」と云つています」

A 「へ作仏をはかることなかれ」とは」

D 「私が仏になつてやろうと計らつて修行してはいけないということですよ。へ私は仏になりたいたい」といふような場合ですら、ともするとへ我を偉い者に仕上げようとする自我心があるからです。私たちが凡夫が自我心を離れた無我の心での修行を行うといふのは非常に難しいのです」

A 「そうすると凡夫の側からの行いでは浄土に生まれることはできないことは分かりました。しかしここでは浄土に生まれる因は信心一つであると云われるのですね」

D 「ええ、本願を信じる信心一つで浄土に生まれることができるのです」

A 「なぜですか」

D 「それは私たちにすでに

けられていて、無我の智慧と慈悲の働きである本願力に撰め取られるから、浄土に生まれることができるのです」

A 「私の方から仏になつていくのではなくて、阿弥陀仏（本願力）が私のところに来て下さつて、その本願力に撰め取られることによつて、浄土に生まれることができるのですね」

D 「ええそうですね。そしてその本願力を信じることによつて撰め取られるのです」

A 「でも、本願を信じたら仏になれるという場合、そこになお自我心があるのではありませんか。へ信じたら仏になれる、へ信じたら結構な浄土にいける」といふ、どこまでも楽を得よう、幸せをつかもうとする自我心があるのではありませんか」

D 「そうですね。それを聖人は往生の信心におけるへ罪福信」と仰せになつています」

A 「自我心は信心の問題において罪福信となるのですね」

D 「ええそうですね。そこで阿弥陀仏は、その罪福信である自我心を否定し、自我の計らいを否定して、いかにしても

自我の計らいでは助からぬ者

であることを知らせて下さるのです。それが第十八願のへ唯除五逆・誹謗正法」のいわれです。いわゆる助からぬ者であるとお知らせ下さるのです」

A 「いかにこちらから信じて助かるう、信じて浄土に生まれようと自我心で計らつても、助かることはできない、まつたく出離の縁あること無き身であることを知らして下さるのですね」

D 「ええその様に知らせて下さることによつて、自我の計らいの手を切つて下さるのです」

A 「自我の計らいは全く間に合わない知らされるのですね」

D 「ええそうですね。そしてその助からない者をこそ助けたもう大慈大悲をお知らせ下さるのです」

A 「難しいですね」

D 「ええ、このところはこのでなくわしくは申せませんが、阿弥陀仏の本願によつて、自我心（計らい）が否定されて、いよいよ助からぬ身であることを知らせて下さり、しかもその者をこそ憐れみたまうて南無阿弥陀仏となつてへ汝をそのままなりで引き受

ける」との広大な大悲心を知らせて下さるのです。そこにはからずもお助けが与えられるのです」

A 「そうすると自我心で功德を得よう得ようという計らいは尽きるのですね」

D 「ええそうですね。ですから聖人はこのところを『唯信鈔文意』（真宗法要）には

へはじめて功德をえんとはからわざれば、自然というなり」と仰せられ、本願力によつて、初めて功德を得たいという自我心が除かれると仰せられています。実は功德を得ようといふ計らう前に、すでに本願力によつて真実の功德を与えられていたのです」

A 「功德（幸せ）は私がつかむ必要はなく、すでに真の功德は阿弥陀仏から与えられていたのですね」

D 「ええそうですね。そのことは南無阿弥陀仏を聞くところに知らされます。ですから、もはや功德を外に得ようとする計らいが無くなり、他に幸せを探し求めることも、外に貪る必要もなくなつて、現在においてすでに充たされるのです」

（了）

信心夜話

『一蓮院談合録より』(16)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

声しあらばあやうからじな火と水中のほそ道見ゆも見えずも

(心の中にあるのは、あなりたいこ
うなりたい、あななつては困る、こうな
つては困るという欲求とそれゆえの欲求
不満が大なり小なり我が心にたえず起こ
っている。瞋恚の火と食欲の水とがたえ
ずまじり合っている私の心。この心の中
を南無阿弥陀仏の声が突き抜けて聞こえ
て下さる。その声はいかにも細く小さい
ようであるが、この声に現れたもう大悲
のまことは壊れない。不思議にも消えな
い。真実そのものである。煩惱の心はい
かに見かけは大きくても、真実の前では
幻のようなもの。念佛のお声が具体的な
白道であり、この道は煩惱によつて見る
ことはできないが、しかし聞こえてくる。
親様はたとえ見えなくても、声であいに
きて下さる。救いたもう、より添いたも
う親がいて下さるから、あやうい人生を
歩ませていただけるのである)

如来様が、己が力一つで助けぞこ
ないはないほどに疑うなと仰せられ
ますことじや。

(南無阿弥陀仏を聞くということは、阿
弥陀仏が己が力一つで必ず助ける)と
の仰せを聞くことである。それを聞いて
も疑うより知らぬのが私。それ一つを信
ぜしめんがために、阿弥陀仏は娑婆に釈
迦如来として出現し、無量寿経を説いて、
南無阿弥陀仏がどうしてできあがつたか
のわけを説いて下さった。阿弥陀仏の深
重な御苦勞を説いて下さった。浄土往生
の因果は法蔵菩薩が私に代わつて難行苦
行の修行をして、南無阿弥陀仏に成就し
て下さった。私にその功德を南無阿弥陀
仏として与えて喚びたもう。そればかり
か、無数の仏たちも南無阿弥陀仏の力一
つで浄土に必ず生まれること(間違いな
し)と同証し讃嘆したもう。

しかるに、南無阿弥陀仏が私のお助け
であると、そう信じたし、信じている
つもりにもなるが、心の中に(それでも
どうも、どうも)と、ものたりない。ぼ
っかりとした、何とも言えないたよりな
い心中がある。この心が邪魔になる。
これがやはり、未だお助けを頂いてい
ないゆえである。自分ではなかなか知ら
れないほどに、心の底に疑いがある。実
は信じたようでも本当は信じていないので
ある。これほど聞法に力を入れているの
に情けない。呼べども叫べども応答がな
い。心の底にちつとも信じていない心が
見え隠れする。このいやな心に蓋をしよ
うとして、無理に喜ぼうとするが、それ

がまた一時のお化粧で、すぐにはげるの
である。聞いても聞いても本当には頂け
ぬゆえ、(阿弥陀様はつれないお方であ
る)というような仏に対する怨み心まで
起こる。十年聞いても、二十年聞いても、
ちつとも聞いていない自分がいる。この
ような自分を見たくはない。信じていな
い自分を認めたくない。そんな自分を認
めたくないから、(それでも時には有難
い気持ちが起こる)というように、心の
中に何かこれといった助かるようなタネ
を探しにかかる。しかるに、こんなタネ
はたよりない。これでこそと喜んで、
その場限りで、元の木阿弥になる。どう
にもこうにも、ウンともスンともいわな
い私の心である。ああなんと情けないこ
とか。ああなんと悲しいことか。今まで
随分聞法してきたが何の役にも立たな
い。自分をごまかさずに我が心を見ると、
どうしてもここへ落ちてくる。実は、

この場が、出離の縁無き助からぬ機
のいる場所である。謗法・闡提・無信の私
がいる場所である。
しかも、この場所へこそ、今弥陀が「己
が力一つで助ける」と喚んで下さつてい
たのである。
この場へこそ、弥陀が「そんな者をこ
そ」と喚んで下さつていたのである。
なんとまあ久遠劫来、(汝をまるまる
引き受ける)と喚びづめに喚んで下さつ
ていたのである。それを知らずに邪見憍
慢で耳をふさいできた。ああ申しわけな
いことであつた。仏様さえも怨むような
罪深い、ご恩知らずの私でございました。
全く逆さまに聞いてあなた様の胸を痛め
続けておりました、と謝らずにはおれな
いのである)

《住職雑感》

物質の現象と意識の現象

がある。どちらも無常で変化し続けている。物質
は原子の活動、それが集まって分子の活動となり、
分子化合物となる。分子化合物はいろいろなもの
になるが、その一形態として細胞が出来る。細胞
が集まって血管や胃腸というような器官になり、
器官が集まって人間の生体になっている。細胞は
分裂を繰り返しながら続いていくが、ついには細
胞の塊である器官(特に脳)は機能を停止する。
これがいわゆる死である。しかし、細胞や器官は
崩壊するが、分子、原子の活動は無くならない。
一瞬一瞬変化して、新たな形を形成していく。そ
れは丁度、氷が溶けて水になり、水は水蒸気にな
るようなものである。すなわち、物質現象はどこ
までも続いて無くならないのである。それと同様、
意識現象も無くならないのではないか。私たちが
物心ついてからの意識を観察しても、一瞬一瞬動
いて止まず、変化して止まない。ちなみに物事は
物質現象でも意識現象でも生滅があるから、生き
るとか動くということができるので、生まれて死
なないのなら変化はなく、動きはないのである。
絶えず生成し消滅し生成し続けていることが動い
ていること、生きていることの本にある。一瞬一
瞬生滅を繰り返すのが物と心の性質である。私が
この世で死んだとする。そうすると死ぬ一瞬の心
は消えるが、しかし消えると言うことは同時に生
まれることになるから、この世で死んでも次ぎに
また何かとして生まれていることになる。すぐれ
た仏教学者モークシャーカラグプタ師(十一世紀
頃)の問答の言葉に「生死の連続を証明するため
になんらかの論証を提出しうるのか」と問い、「答
えよう。心というものはすべて、次の瞬間の心と
結びつくものである。たとえば現在の心のように、
死ぬときの心も、心にかわりはない。(だから、
死ぬときの心は、次の瞬間、すなわち、次生のは
じめの心と結びつく。)」といっている。死んで
も心は連続すると師はいつているのである。